

地域の人物と聴き合い活動を用いた 社会科授業づくり

— 小学校における社会科授業構成研究 (3) —

福井 駿・金 寶美・池野範男

(2013年10月3日受理)

The Strategy for Teaching and Learning Social Studies Using Teaching Materials as a Key Person in Community and Activity of Listening the Voice of Others:
A Study on Construction of the Unit in Primary Social Studies

Suguru Fukui, Bo-Mi Kim and Norio Ikeno

Abstract: The aim of this paper is to pick up three primary schools as representatives of studying the construction of social studies lessons by school teachers, to analyze a view of social studies education, the unit of primary social studies and a lesson and to abstract the principles from the unit and its lesson. As third in this paper we take up the social studies in Akasaka primary school in Fukuoka city, Fukuoka prefecture, using teaching materials the key person in community and an activity of listening the voices from other students.

Key words: Primary School, Social Studies, Strategy for Teaching and Learning, Key Person in Community, Activity of Listening the Voices from Other Students
キーワード：小学校，社会科，授業づくり，地域の人物，聴き合う活動

0 第三稿の問題の所在

本連続稿の目的は、小学校の教育現場で実際になされている社会科授業構成に関する研究の代表的なものを取り上げ、社会科授業構成に関する研究にはどのようなものがあるかを解明し、小学校教育現場における社会科授業づくりの類型を示し、現場からの社会科授業改革の現状を明らかにすることである。

教育現場における学校を挙げての社会科授業開発や研究が研究対象として取り上げられることが少なく、現実の学校における社会科授業開発や研究は十分に捉えられているとはいえない。本研究は、このような状況は問題であり、教育現場において、とりわけ、学校全体で取り組んでいる社会科授業づくりに焦点をあ

て、その新しい展開を紹介するとともに、その意義付けを行うことを目指している。

そこで、現在、小学校における社会科授業構成として現実になされているものを見だし、可能なものを明確にし、それぞれの到達点と課題を究明するとともに、相互の関連を付けようとするものである。本研究では3つのタイプを見つけ、それぞれにおける社会科授業構成における原理と特質を解明し、いわゆる教育現場における社会科授業構成の現実的可能性を探求するものである。

1つ目が、福山市立曙小学校を事例にした、地域の教材と知識の構造図を活用した社会科授業づくり(池野・金・福井, 2012)。2つ目は、福山市立道上小学校を事例とした、話し合い活動を活用した問題解決学

習を進める社会科授業づくり（金・福井・池野、2013）。3つ目は、本稿で取り上げる、福岡市立赤坂小学校を事例とした、地域の人物を取り上げ、聴き合い活動を用いた社会科授業づくり、である。

本稿では、3つ目のタイプとして福岡市立赤坂小学校を事例にしてその社会科授業づくりを究明する。その特質を先取りして示すと、3つある。

第一は、各単元において適切な地域の人物を常に取り上げることである。社会科の学習を、子どもたちが生活している地域の学習として組織するために、地域の中から鍵となる人物を取り上げ、対象となることに關してその人がどのような活動をしているのか、その理由やわけを探求するように社会科授業づくりを構成する。

第二は、学習課題に対する複数の考えを提示し、子どもたちが、これまで考えられなかったことを考えるようにしていることである。複数の考えは、異なった考えや対立する考えを示し、自らの考えと比較したり、問い直したりするために用意される。違った考えを2つ以上示すようにして、よりよいものを追究する社会科授業にしようとする。

第三は、子どもたちがお互いの意見を聴き合う活動を重視し、証拠と根拠を示し、お互いの考えを聴くことに重きをおいた「聴き合い活動」をすすめていることである。この「聴き合い活動」は、他者の考えを聴き入り、知ることによって、一人ひとりの考えを肯定的に受け入れ、一人ひとりの考えを大切にす。それにより、子どもたち全員の考えを尊重することを目指している。常に社会に關して異なる意見を考えだし議論し、自らの意見を示すことができることを保証しようとしている。

これら3つの特質を持った福岡市立赤坂小学校の社会科授業研究とその開発を取り上げ、社会科単元開発の事例分析を通して、社会科授業づくりの原理と構造、その課題を明らかにしたい。

1 福岡市立赤坂小学校の社会科授業研究

赤坂小学校は、1953年の開校以来、福岡市における教育推進校として多様な研究に積極的に取り組み、特色ある学校づくりを推進してきた。その長い取り組みのなかで一貫して目指されてきたことは、子ども自身が自分の課題をもち自分にとって価値ある学びを展開することであった。この課題に対して、学校で独自のカリキュラムを開発し、実践し、評価し、より子どもが主体的に学べるカリキュラムへと改善していく、学

校カリキュラムの創造を主な研究活動としてきた。また、国際理解教育カリキュラムも積極的に開発し、提示している。

特に、2003年からは子どもの主体的な学びを生み出すことを目指した研究を進め、そのために、具体的な手立てとして、聴き合い活動とポートフォリオ評価を取り入れ、それらを中心にした各教科での単元開発を積み重ねてきている。

聴き合い活動とは、聴くという行為に主眼をおいた話し合い活動のことである。赤坂小学校では、「A君が〇〇と考えたのはなぜだろう」、「A君とB君の違いはどこにあるのだろう」というように考えの違いに着目させ、友たちの考えを理解しながら自分の考えを見直したり、友たちの考えのよさに気づいたり、自分の考えに自信を持ったりすることができるような聴き合いをするように指導している（赤坂小学校、2008a：9）。

ポートフォリオ評価は、これまでの学習の足跡や、自分の考えの変容を蓄積したものを活用する評価活動の1つの方法である。赤坂小学校では、ポートフォリオ評価を導入することにより、子どもの成果物や自己評価カードなどを蓄積、活用し、教師が子どもたちの学ぶ意欲や思考、判断、表現などを含む学力の全体像を総合的に捉える多面的・総合的な評価を行なうと同時に、子どもたちが自分の学びを振り返り、これまでの学びを新しい学びに活用するようにしている（赤坂小学校、2008a：12-17）。

現在の赤坂小学校は「21世紀をたくましく生きるための豊かな英知と豊かな心を持った児童の育成」を教育目標にしている（赤坂小学校、2008a：5）。「豊かな英知」と「豊かな心」というものは、「豊かな学び」として実現される（同）。豊かな学びを子どもたちが作りだすことを目指し、学校の研究を進めている。それが学校を基盤としたカリキュラム開発であり、単元単位でデザインされ、その集合として、学校カリキュラムを作り出している。この単元単位でデザインされた学習が赤坂小学校における子どもの主体的な学びを生み出し、改善する基盤となっている。

赤坂小学校における社会科授業研究は、この主体的な学びのカリキュラムを創造する中に位置づけられる。社会科での研究目標は、「子ども一人一人の社会的な見方・考え方を深め、考える力を育てる」ことであり、その創造を通して、社会科学習指導を改善し、「豊かな学びをつくる子ども」を育成することである（赤坂小学校、2008a：63）。子どもたち一人一人が持っていたり獲得したりする社会的な見方・考え方をより深いものにし、その過程で社会について考える力を育

てようとしているのである。

そのために、地域の人物と聴き合い活動を中心に活用して、現在の市民に必要とされる人や社会とかわり、社会的な見方・考え方の発展・深化を図り、考える力を養う単元を開発し、蓄積している。以下では、第3学年と第6学年の単元を事例にして、赤坂小学校が社会科授業づくりをどのように進めているのか、またその基本原理と特質、課題はどのようなものかを明らかにしたい。

2 赤坂小学校の社会科授業づくり

（1）第3学年単元「博多の心を届けるにわかせんべい〜工場で作られるもの」の場合

まず、第3学年の単元「博多の心を届けるにわかせんべい〜工場で作られるもの」（赤坂小学校、2008a：69-74）を例として取り上げる。その指導計画は、資料1のように示されている。本単元は10時間の教室での授業と2時間の見学からなる、計12時間の単元である。博多にわか煎餅とは、博多に伝わる話芸の伝統芸能である「博多にわか」のために使われるお面を模して作られた煎餅で、福岡の銘菓である。

本単元のタイトルにあるように、にわか煎餅は博多の心をとどけるものとして、考えられている。このタイトルには、にわか煎餅は商品であるとともに、伝統品でもあるという社会的な見方・考え方への発展、深化を図ることが意図されている。

①単元のねらい

本単元は「自分たちの生活を支える福岡市の生産や販売について、その仕事の特色や他の地域とのかかわりなどを見学・調査したりして調べ、それらの仕事に携わっている人々の工夫や他地域とのつながりを考えるようにすること」（赤坂小学校、2008a：69）がねらいである。これは地域の生産や販売について、見学・調査などを通して調べ、人々の工夫や他地域とのつながりを考えるようにする、とされている小学校社会科学習指導要領第3学年の内容の一つに従ったものである。

この学習指導要領の示す内容は、地域の生産や販売という調査や理解の対象を指示している一方、子どもたちがどのように考えを深めていくのかに関しては、示していない。そのため、多くの小学校で、地域の生産や販売の調査や理解そのものをねらいにした学習が生み出される。身近な工場や商店を見学させ、調べたことを発表する学習や、そこで知った人々の願いやおもいを子どもたちなりに理解するような学習である。

赤坂小学校の本単元は、この学習指導要領に従った調査や理解を主に学習の内容を示したものであると定めているところに特徴がある。

本単元の目標は、次の目指す子どもの姿に示される（赤坂小学校、2008a：69）。

- 福岡の銘菓であるにわか煎餅を作り続ける高木さんの姿を通して、福岡市の生産や販売の様子に関心をもち、それらと他地域とのかかわりなどを意欲的に調べることができる。（意欲・関心）
- 福岡市の生産や販売の様子について、見学したり、資料を調べたりして、事実をもとに追究・整理し、フリップなどの表現物をもとに効果的に聴き合うことができる。（学び方）
- にわか煎餅工場の見学や聴き合い活動を通して、工場の人々の努力や工夫が自分たちの生活に結びついていること、広く他地域ともかかわりがあることを理解することができる。（認識）

それは、このような調査や理解は聴き合い活動という独自の学習の方法と一つになって、はじめて目指す学習になるということを示している。

学習の方法である聴き合い活動は、自らの考えを再構成することを目指している。「考える」ことを、「自らの考えを再構成すること」に実質化する。本単元では、学習指導要領の示している内容に従いながらも、聴き合い活動と結びつけることで、学習指導要領が不十分にしか示していない部分を独自に発展させているといえよう。それは、赤坂小学校が、社会科全体で、現在の市民に必要とされる人や社会とかわり、考える力を養うために、独自に発展させているところである。

②指導計画

本単元をどのように指導しようと計画されているのかを見ていこう。赤坂小学校ではいずれの単元も、つかむ、さぐる、あらわす、の3つの段階に分けられている。本社会科単元も資料1のように、この3つの段階で組織される。

まず、つかむ段階（3時間）である。この段階は、事実に出会い、学習問題を作ることである。にわか煎餅の箱を見て、子どもたちが関心を持つところから始まる。福岡の子供たちにとって、にわか煎餅というお菓子は非常に身近な題材であり、その生産・販売にもうまく興味をもたせることができる。子どもたちはそのままでも、にわか煎餅はいつ、だれが作ったのだらうのような、にわか煎餅の生産・販売に関する疑問を持つだろうし、喜んで調べ学習をするだろう。

しかし、本単元では子どもたちの興味のまま、調べ学習をさせるのではなく、まず、にわか煎餅を作り続けてきた高木雄三さんのお話を聴かせる。その上で子どもたちに高木さんはどのような思いで、にわか煎餅を作り続けているのかを考えさせる。高木さんのにわか煎餅の生産と販売に対する見方・考え方を学習の主題にするのである。

地域でこのにわか煎餅を作り続けている高木さんを取り上げるのは、商品としてのにわか煎餅と、生産品としてのにわか煎餅をつなぐ、生産者を具体的に示し、その人物を通して、その生産の意義を追究するためである。さらに高木さんという身近な人物のお話を聴くことで、追究する意欲や関心を高めるとともに、地域社会の事実と関わる追究を続けるいくつかの新たな視点を見つける。

教師は視点を変えた質問をするなどの補助をしながら、いくつかの感想が出るようにする。そうして違う感想が出てきたところで、あらためて「高木さんがこだわりを持ってにわか煎餅を作り続けているのはなぜだろう」と問いかける。子どもたちは自身の学習経験・生活経験から予想し、それぞれ図1のような考えマップに自分の予想と根拠を記入する。

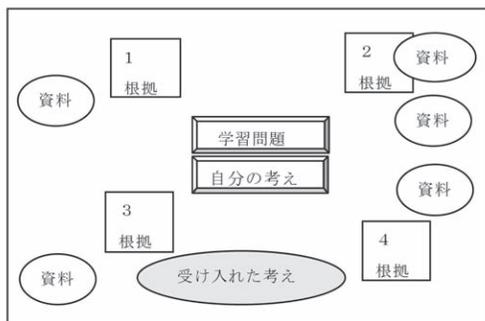


図1 考えマップ (高学年) (2008a : 64)

考えマップは子どもたちなりの経験に基づいたにわか煎餅の生産や販売に対する見方・考え方であり、学習の出発点となる。

そこで、一回目の聴き合い活動をする。この聴き合い活動はクラス全体で行われ、「高木さんがこだわりを持ってにわか煎餅を作り続けているのはなぜだろう」という問い(学習問題)を作る。この問いに対してのそれぞれの予想と根拠を聴き合うことによって、学習問題に対する予想には、いくらかの相違点があり、大きく2つの考えがあることに気づかせる。それを二つの考え、A「博多にわかよさを伝えていきたいから高木さんはにわか煎餅を作り続けている」、B「地元で取れたものを使い、たくさんの人においしいもの

を届けたいから高木さんにはにわか煎餅を作り続けている」にまとめる。二つの考えにまとめ、どちらがより良いのかを問題とすることによって自分の考えを相対化させ、にわか煎餅の生産と販売について、自分はどうのように考えることができるのかという学習問題を子どもたちにつかませる。

次は、さぐる段階(5時間)である。さぐる段階は、学習問題に対して自分の予想をもち、追究することである。この段階では、にわか煎餅の生産と販売について、子どもたちそれぞれが自分の考えからにわか煎餅の生産や販売について調べる。使う手段は、工場見学・インターネットなど、様々なものがある。教師は、にわか煎餅の工場に連れて行き、見学させる。直接見ることが可能な事実、例えば煎餅の焼き上げの工程や出荷準備の様子を見せる。また、インターネットを使い、様々な幅広い事実、例えば博多銘菓の売上げランキングなどがあることを見せる。

その上で、自分の考えの根拠となる事実を中心に集めさせる。例えば、博多にわかよさを伝えていきたいから高木さんにはにわか煎餅を作り続けている、という考えAの証拠となるような「にわか煎餅を生産している会社はにわか振興会とつながりがある」という事実を調べる。子どもたちが調べるのを終えると、二度目の聴き合い活動をする。そのために、それぞれが調べた事を図2のような形式のフリップに整理して、自分の考えを証拠と結びつける形でまとめる。



図2 フリップ (2008a : 64)

このフリップを使って、同じ考えのグループで互いに調べてきたことを聴き合い、ほかの子ども意見を取り入れ、自分の考えマップ、フリップを作りなおす。このようにすることによって、子どもたちの調べたものは、ただの事実ではなく、自分の考えの根拠として取り扱われる。そして、互いに聴き合うさいに、同じ構造をしているフリップをつかって聴き合いをすることによって、自分の考えを裏付けるための根拠として何を取り入れるかを他人と比較することができるようになる。子どもたちは、聴き合い活動を通して、フリップをつくり、自分の考えを作り出すとともに、考えマップを作り変え、新たな自分の考えに発展させ、

自分の考えの証拠となる事実やその事実を表す資料を吟味することができるようになるのである。

最後は、あらかず段階である。この段階は、探る段階での追究にもとづき、三度目の聴き合い活動をし、単元を振り返る。三度目の聴き合い活動は、全体とグループの両方で行われ、2つの考えの共通点を探すために行われる。2つの考えは、確かに違う所に焦点化してはいるが、「地域の特色を生かした生産と販売」という共通した点を持っており、この共通点からみると、どちらの考えも対立するものではないことに気づかせる。2つの考えの共通点からみれば、自分の学習問題の答えに、違う考えを含んで、再度学習問題の答えを作ることができる。そして、単元の締めくくりとして、「福岡市の工場で作られるもの」という作文を書き、本単元の結果として考え直した学習問題への答えを書くことで、単元の学習を終える。

③第8時の展開

本単元のハイライトとなる、第8時（見学2時間を含め）の展開を取り上げ、学習指導の詳細を考察する。この考察では、社会的な見方・考え方を再構成するとはどういうことであるかを検討しよう。

第8時は、これまでの学習を振り返りながら、本単元の学習問題「高木さんがにわかせんべいを作り続けるのはどうしてだろう」と、学習問題に対するA「博多にわかさんのよさを伝えていきたいから高木さんはにわか煎餅を作り続けている」、B「地元で取れたものを使い、たくさんの人においしいものを届けたいから高木さんはにわか煎餅を作り続けている」という2つの考えを確認することから始められる。そして2つの考えのグループの代表者一人ずつが、それぞれの考えと根拠が整理されたフリップを使って発表し、クラス全員でそれを聴く。意見の違う発表を聞き、相手の考えのどこが違うのか、どんなところが納得できるかを発表しあう。それを通して、2つの考えの共通点「地域の特色を大切にしながら、にわか煎餅を作っている」をクラス全員で探す。共通点をクラスで共有できたところで、違う考えの混じった少人数のグループ（集団）に分かれ、聴き合い活動を続ける。ここでは、子どもたち全員が自分の考えをまとめたものを発表し合う。最後に聴き合い活動をもとに、自分の考えを改めて、作文の形で表現する。

本時のはじめに、子どもたちはAかBかどちらかの考えと、それにもとづいて自分たちで調べた根拠を整理したフリップを持っている。これはその時点での子どもたち自身の社会的な見方・考え方であるとみなすことができる。また、子どもたちは、ここまでの聴

き合い活動で、自分の考えとその根拠は何なのか、を自分で表現できるほどに整理してきている。そこで、子どもたちは、自分の考え方と違う考え方の共通点を探ろうとすることにより、AとBのフリップの共通点である「地域の特色を生かした生産と販売」という社会の見方・考え方を発見することになる。この見方・考え方を発見し、改めて自分の考えを整理することによって、子どもたちは、もともとAかBのどちらか見方・考え方から、それらを含みこむような新しい見方・考え方を作ることができるようになる。このようなプロセスによって、子どもたちは社会の見方・考え方を再構成することができるようになるのである。

④特質と課題

第3学年の「博多の心を届けるにわかせんべい～工場で作られるもの」の指導計画と本時の展開を検討してきた。

この単元から、次のような6つの特質を示すことができる。第一は、高木さんのような、地域の人物のお話を教材にすることである。地域の人物は、自分自身の目で社会を見ており、そのお話は単なる事実の集合や、科学的な理論ではなく、一つの社会的な見方・考え方である。にわか煎餅という、子どもたちになじみのあるものと社会的な見方・考え方を結び付け、考える材料にすることである。第二は、高木さんのお話が一つの社会的な見方・考え方であったように、社会科授業において、教師が子どもたちとともに、考えるのは、この社会的な見方・考え方であり、それを複数示し、相違点とともに、共有点、合意点を見いだすことで、一人一人の子どもたちの社会的な見方・考え方を深め発展させる。第三は、聴き合う活動である。その考えの代表者の考え、グループでのそれぞれの考えを発表するのではなく、特定の考え、例えば、A「博多にわかさんの伝統をつたえていきたい」という考えを一人一人が代表者から、あるいはグループの一人から聴く。それも、考えマップに基づいたフリップに示されるように、根拠とその資料（データ、証拠）のセットで説明されることを聴き、その説明を繰り返したり、不明やわからないことをただしたりするのである。第四は、そのために、教師は、事前に取り上げる教材（にわか煎餅）と人物から引き出せる考えを複数用意する。そのため、「事実を支えられるもの」、「社会背景が見えるもの」、「追究の意欲がもてるもの」、「追究の見通しがもてるもの」、「追究の方法が分かるもの」の5つを設定条件としてあげている（赤坂小学校、2008a：65）。第五は、教師が複数の考えを共通化、共

有化できる見通しをもっていることである。考えや根拠を説明する中で、2つの考えにかよっているものがある、と子どもたちが見つけることができる見通しを予め持っていることである。第六は、その結果、新たな社会的な見方・考え方へ深めたり、発展させたりできる学びの学習になっていることである。

これら六つの特徴は、赤坂小学校の社会科が、「子ども一人一人の社会的な見方・考え方を深め、考える力を育てる」という目的を実現するためのものである。

(3) 第6学年単元「川上音二郎からのぞく自由民権運動～明治維新から世界の中の日本へ」の場合

次に、第6学年の歴史単元「川上音二郎からのぞく自由民権運動～明治維新から世界の中の日本へ」(赤坂小学校, 2008a : 87-92)を事例として取り上げ、赤坂小学校の社会科授業にどのようなヴァリエーションがあるかを示す。それを通して赤坂小学校の社会科授業の可能性と限界を示したい。

①単元のねらい

本単元は、「川上音二郎の「オッペケペー節」を通して、明治政府の政策に対する人々の思いや願いをとらえるとともに、自由民権運動の広がりが近代国家としての社会の仕組みである憲法発布につながっていったことを理解すること」をねらいとしている(赤坂小学校, 2008a : 87)。これは、第3学年の単元と同じく、小学校社会科学習指導要領の内容に従ったものである。また、これを学習の内容を示したものとし、子どもたちが考えを再構成しながらこの内容を理解することをねらいとしていることも第3学年と同じである。

②指導計画(本時の展開)

指導計画(本時の展開)は、資料2のとおりである。他の社会科単元と同じく、つかむ、さぐる、あらわす、の3つの段階に分けられている。それぞれの段階で、聴き合い活動をすることによって、川上音二郎の「オッペケペー節」が人々の間で大流行した理由に迫っていく。本単元では、考えA「明治政府の行った政策によって、人々の生活が苦しくなり、批判が高まったから」と考えB「文明開化によって、人々の間に欧米の新しい考え方が広がり、言論による運動が高まったから」が用意され、子どもたちはこれら二つの考えに分かれて互いの考えを聴き合う。そして互いの考えには、「そもそもより良い社会を願う気持ちがあった」という共通点がある。この共通点を見つけることによって、子どもたちは考えA、Bどちらかの考えを、両方を含んだ考えに再構成することができる。

本単元は、歴史的な内容の学習も、歴史をどのようにみるかという社会的な見方・考え方の学習として取り扱われている。子どもたちの考えが再構成されるように組織化されている。

小学校社会科の歴史的な内容の学習は、歴史上の人物のねがいや思いを理解することで終わる学習となることが多いが、本単元は、歴史をどのようにみるかという社会の見方・考え方の学習の中に、歴史上の人物のねがいを理解することを位置づけることによって子どもたちは、歴史に対する考えを再構成する学習をすることになる。

赤坂小学校の社会科授業においては、どのような学習の対象であろうか、それを見方や考えとして扱えば、それを再構成することによって、考えを深めることができると考えられているのである。

第三学年の単元と大きく違っている点もある。地域の人物の使われ方である。本単元では、さぐるの段階で、福岡市総合図書館の野口さんから、当時の社会の動きや人々のようすについての話を聴く。第三学年の単元では、つかむの段階で地域の人物の話が教材として活用されていた。この違いは、想定されている子どもたちの力の違いによると思われる。

③特質と課題

本単元では、子どもたちは、川上音二郎の「オッペケペー節」が大流行したということに関心を持ち、学習問題を作る際に、地域の人の話は使われない。子どもたちは、川上音二郎の「オッペケペー節」に関する事実をばらばらに調べるのではなく、それをどのように見るのか、考えるのかを中心に学習する。6年生になればこのことが自然にできると想定されているのである。6年の歴史単元における地域の人物の話は、学習の対象そのものとなるのではない。川上音二郎のオッペケペー節の流行という学習の内容に関する社会(歴史)的見方・考え方の一つとして提供される。子どもたちのもっている、あるいはもち始めた社会(歴史)的見方・考え方とその根拠の構造は異なった、社会(歴史)的見方・考え方とその根拠の構造として提示される。このような提示によって、より多面的で多様な社会(歴史)的見方・考え方に触れ、自らが考えるものを深めたり発展させたりできる、学習の発展・深化のヒントとなるように使われている。

しかし、社会的な見方・考え方の取り扱い方には、問題もある。第6学年の単元を見て、より明らかになるのは、赤坂小学校の社会科授業づくりでは、相反する、あるいは、完全に対立する社会的な見方・考え方を取り扱っていないことである。この単元では、「そ

資料2：第6学年「川上音二郎からのぞく自由民権運動」

学習活動と内容	教師の支援	評価基準		資料
1 これまでの学習を振り返り、本時のめあてをつかむ。	○本時のめあてを確認し、学習の見通しをもたせる。	基準A ・意欲的に聴き合いをしようと、本時交流への気持ちを高めている。	基準B	「オッペケペー節」の音二郎の拡大図
学習問題：川上音二郎の「オッペケペー節」が人々の間で流行したのは、なぜだろう。				
本時のめあて：「オッペケペー節」が流行したわけについて聴き合い、友達の考えのよさを見付け、自分の考えを深めよう。				
2 聴き合い活動をする。 (1) 異質グループで聴き合う。 ○自分の考えと友達の考えを比べ、考えのよさを見つける。 ○考えマップに書き加える。	○考えの違いが視覚的にわかるように板書の構成を工夫する。 ○考えと根拠の妥当性を「考えのよさ」と	・ポートフォリオを活用しながら自分の考えを筋道立てて発表し、相手に分かりやすく伝えている。	・ポートフォリオの資料を指しながら自分の考えを発表し、相手に伝えている。	「オッペケペー節」の映像資料 フリップ
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【考えA】 ・明治政府の行った政策によって、人々の生活が苦しくなり、批判が高まったから。</p> <p>《根拠の例》 ・農民の蜂起 ・徴兵令 ・地租改正</p> </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【考えB】 ・文明開化によって、欧米の新しい考え方が広がり、言論による運動が高まったから。</p> <p>《根拠の例》 ・文明開化 ・「学問のすすめ」 ・自由民権運動</p> </div>			
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><共通点> ・政府の政策に不満をもっている。 ・自分たちの声を政府に届けたい。</p> </div>	して、受け入れられるものをマップに書き加えるようにうながす。	・ポートフォリオで前単元とつなぎながら、自由民権運動が広がった背景についての自分の考えを筋道立てて伝えている。	・自由民権運動が広がった背景について、自分の考えを筋道立てて伝えている。	自由民権運動の広がりを示す風刺画
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><合意点> 政府の政策に不満をもった民衆は、よりよい生活を願って、自由民権運動を広げていき、欧米に追いつきたい政府も自由民権運動を認めざるを得なかったことが「オッペケペー節」の大流行につながった。</p> </div>	○諸外国が日本をどう見ているのか考えさせ、合意点を導くための資料を提示する。			
<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px;"> <p><本時でめざす子どもの姿> 私は、「オッペケペー節」が大流行したのは、明治政府の政策で人々の生活が苦しくなり、批判が高まったからだと思うんだけど、○○さんの「学問のすすめ」の資料から、「文明開化によって、欧米の新しい考え方が広がり、言論による運動が高まったから」という考えもよく分かりました。また、民衆は、よりよい生活を願って自由民権運動を広げていき、欧米に追いつきたい政府も自由民権運動を認めざるを得なかったことも分かりました。この点を取り入れて、自分の考えをつくり直してみたいです。</p> </div>				
4 次時の学習を知る。 ○自己評価カードをもとに、学習問題についての考えを再構成することを伝える。	○はじめの考えを振り返らせ、考えの変容を中心に自己評価カードに書かせる。	・「オッペケペー節」が大流行したわけについて、自分の考えを2つ以上の点から見直している。	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>基準Bに達しない子への支援 ・友達の考えのよさとはじめの自分の考えを振り返らせ、考えが変容した点をとらえさせる。</p> </div>	自己評価カード

もそもより良い社会を願う気持ちがあった」のような共通点から、歴史の解釈を多面的に、多様に広げている。しかし第6学年までをとおして、対立した、あるいは相克するような歴史解釈を取り上げ、子どもたちを選びとらせるという場面は存在しない。

現実社会では、相反する理解から一方を選びとって、行動をしないとイケない場合が多い。このような現実の社会において求められている決定する力を赤坂小学校の聴き合い活動では、十分に育てることができていない。これは、義務教育の最終段階の中学校社会科の役割だと暗黙に理解されているようである。

3 赤坂小学校社会科授業づくりの基本原理と課題

赤坂小学校の社会科授業づくりは、事例として取り上げた第3学年の「博多の心を届けるにわかせんべい～工場で作られるもの」、第6学年の歴史単元「川上音二郎からのぞく自由民権運動～明治維新から世界の中の日本へ」のように、子ども一人ひとりの社会的な見方・考え方を深め、考える力を育てることを目指している。単元全体を通して、子どもたちの考えを成長させるプロセスとして構成し、初めに持っていた考えをより深く根拠のあるものに作り変えることが基本の学習となっている。その社会科授業には、大きく3つの原理が働いていると考えられる。

第一の原理は、社会科授業の目標設定に関わる原理である。学習の過程をとおして、当初の考えをより根拠のあるもの、あるいは発展的なものに変えて、社会的な見方・考え方を作り変えていくことを目標としている。そのために、地域の人物のお話を教材にして、単元をとおして社会的な見方・考え方を学習の対象とする。地域の人物は、自身の目で社会を見ており、そのお話は単なる事実の集合や、科学的な理論ではなく、一つの社会の見方・考え方となっている。未修の学習内容に対して、子どもたちが詳細な事実を知ることや、科学的な理論を持つことはまれであるが、子どもたちなりの経験に基づいた社会的な見方・考え方は持つことができる。学習の出発点で、それぞれの子どもが経験的に持っている考え、あるいは地域の人物のお話に示される考えを持つことになる。学習する対象を社会の見方・考え方とすることによって、学習の目標を子どもたちの考え（社会的な見方・考え方）を成長させることに設定することができる。

第二の原理は、学習方法、学習活動の原理に関わる原理である。二つ以上の違った見方・考え方を用意し、それを聴き合うことである。単元のめざすところは、

子ども一人では獲得することのむずかしい社会的な見方・考え方の獲得である。そこで、この到達地点を共通に持っている2つの違った見方・考え方（考え）を用意する。そして、共通点に注目して、2つの考えを再構成すれば、到達地点である社会的な見方・考え方は、一つの考えからの深まり、もしくはもう一方の考えからの深まりの地点として位置づけられる。獲得すべき社会的な見方・考え方を1つのものとして捉え、それを追究する場合のような一直線型の学習とはちがひ、到達地点へとたどり着くまでの間に、自己の見方・考え方を広げるプロセスが十分に保証された学習になっていることである。

第三の原理は、教材構成に関する原理である。聴き合い活動のために、それぞれの考えの根拠となる事実や資料をある程度、設定することができる。2つの考えのよさや共通点を見つけるためには、考えを整理して互いに比べることができるようにならなければならない。聴き合い活動では、考えとそれを支えるいくつかの根拠をまとめた構造を作り、それを比べる事をさせる。そのために2つの考えを支える事実や資料を設定し、考えを根拠づけるという構造を枠組みとして示す。その枠組の中で、子どもたちは自分の調べて来た根拠を加えて、自己の見方や考え方を整理する。モデルとしての考え－根拠の構造を示すことによって、子どもたちが考え－根拠の形で、考えを比べることを保証する。

これら3つの原理にもとづいた赤坂小学校社会科授業づくりは、地域の人物と、聴き合い活動を使って、単元全体を子どもたちの考えが成長するプロセスとして構成する。地域の人物はただ子どもたちの興味を引くのではなく、学習の内容を一つの社会的な見方・考えとするものである。聴き合い活動は、活動そのものが目的である“話し合い”や“発表”ではなく、2つの考えを考え－根拠という形で比べさせることを通して社会的な見方・考え方を再構成するという構造を持っているものである。

4 教育現場の社会科授業づくり研究の総括

本連続稿では、教育現場で社会科授業づくりを研究し、それぞれの学校の社会科授業構成研究を進めている3つの小学校を取り上げた。1つが、福山市立曙小学校。この学校は、地域の教材を開発しながら、知識の構造図を用い、教育内容の構造化を果たし、教育指導の高度化を果たしている。2つが、福山市立（旧神辺町立）道上小学校。教育内容の構造化も図るが、主

として、教育方法、とりわけ学習過程の構造化を進め、つきつめる過程を重要視している。その過程で、子どもたちの考えを高めたり、深めたりしようとする。3つは、福岡市立赤坂小学校。社会に対する考えを作り出したり、深めたり、発展させたりして、社会的な見方・考え方を育てることを目指す。そのために、地域の人物のお話を活用し、聴き合い活動を準備する。聴き合い活動は、考えマップとフリップと併せ持つて、1つの活動をなしている。特に、社会科授業では、社会的な見方・考え方を深め発展させる重要な働きをしている。

これら3つの学校の共通点は、いずれの学校も、地域の視点をどこかに組み込み、地域と結びつけて社会科授業を構成していることである。曙小学校は、地域の社会構造を教材そのものとして、道上小学校は、地域の問題を教材における課題解決として、また、赤坂小学校は、地域の人物のお話を社会的な見方・考え方の出発点として、それぞれ地域の教材を活用し、社会科授業を子どもたちの生活と結びつけ、現実性（リアリティ）を保持している点に特質を持っている。

一方、異なる点は、曙小学校と道上小学校は、主として、社会認識の形成に、主眼を置いた社会科授業を構想しているのに対して、赤坂小学校は、子どもたちの一人一人の考え（社会的な見方・考え方）の深化・発展を重視し、その育成を図っている。これらは、社会科教育観において異なっている。社会科が社会認識を通して市民的資質を育成するという古典的定義に従うと、3校とも定義内に存在しているが、曙小学校と

道上小学校は、認識重視、赤坂小学校は資質重視と、社会科の目標間において異なっている。

このような相違は、全国的な傾向ではないかと想定しうる。しかし、古典的な定義を超えるものをめざした社会科授業づくりを進めている学校も存在するだろう。そのような学校の発掘を次の課題にしたい。

【参考文献】

- 池野範男・金寶美・福井駿（2012）「地域教材と知識の構造図を用いた社会科授業づくり：小学校における社会科授業構成研究（1）」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部、第61巻。
- 金寶美・福井駿・池野範男（2013）「地域に根ざした課題解決活動を用いた社会科授業づくり—小学校における社会科授業構成研究（2）—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部、第62巻。
- 福岡市立赤坂小学校（2008a）、『研究発表会要録』
- 福岡市立赤坂小学校（2008b）、『実践記録集』
- 福岡市立赤坂小学校（2012）、『研究紀要』
- 文部科学省（2008）、『小学校学習指要領解説社会科編』

【謝辞】

授業見学、インタビューなど、赤坂小学校長、橋木昭寿先生を始め、先生方のご協力に感謝しております。（池野範男）